

教育情報コーナーからのお知らせ

今から5年前の平成17年4月、国語教育に大きな功績をのこした“大村はま”さんが、くも膜下出血のため亡くなりました。98歳でした。専門の国語の分野だけでなく授業や教師に、きびしくそして温かいまなざしを注ぎつづけておられました。

『教えるということ』『日本の教師に伝えたいこと』は、センターでも、最も多く読まれた本のひとつです。

『日本の教師に伝えたいこと』（筑摩書房）からご紹介します。



いきいきとした教室とは

いきいきとした教室、これは全部の先生の悲しいほどの願いです。

この「いきいきとした教室」というのは、単なる明るい教室、元気のいい教室とは違います。「ハイハイ」「ハイハイ」と手をあげている、そのような程度ではないのです。「いきいきとした教室」というのは、ひとりひとりが、それぞれに、確実な成長感というのでしょうか、一步一步高まっている、自分が育っている、という実感といったらよいのでしょうか、それが持てる教室のことなのです。もちろん、子どもはそんな表現でとらえてはいませんが、自分が伸びていると感じることは、ほんとうに、人をいきいきとさせます。心の底から溢れ出てくるものがあります。

できたの、できないのと、喜んだり悲しんだりしている世界ではなくて、みんなが、それぞれの成長を願い、一生懸命生きている教室がほんとうに、いきいきしている教室だと思います。また、そこで仕事をしている教師その人が、その教室で成長していない教室は、いきいきとしそうもありません。昨日よりも今日というふうに、何か気づいたり工夫したりして、教師自身に成長の実感がなくては、いきいきと指導にあたる力、子どもを動かす迫力が出てこないと思います。

教師の仕事はこわいもので、あり合わせ、持ち合わせの力でやっても、やさしく、あたたかな気持ちで接していれば、結構、いい雰囲気を作れるものです。子どもはもちろん、父母や同僚とも、いい関係を持っていけるものです。いい教師で過ごせるのです。そこが、こわいところです。安易に流れず、なんとかすますのではなく、人を育てるほんとうの仕事を見つめ、恐れながら、力を尽くしたいと思います。端的に言えば、あり合わせ、持ち合わせの力で、授業をしないように、ということです。何事かを加えて教室へ向かい、何事かを加えられて教室を出たいと思っています。「いきいきと」させるものは、そういうところから生まれてくると思います。



『日本の教師に伝えたいこと』大村はま著(筑摩書房)